

養育院の思い出 1 空襲

久保田嘉一郎

養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア

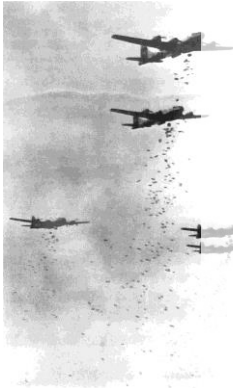
板橋在住の久保田さんが、自分史を書かれていて、その中で戦中戦後の旧養育院の様子について書かれたとの事で原稿を拝見した。昭和 20 (1947) 年 4 月の空襲のこと、進駐軍が来たときのこと、昭和 24 年の昭和天皇行幸のことなど、子供の目で見えた当時の様子が書かれている。櫻園通信への掲載の了解いただいたので、3号に分けて掲載することにする。

その頃の養育院のあらましについて述べる。

関東大震災後、大塚から板橋に引越をした養育院本院は、鰥寡孤独の収容、授産事業、保育、感化事業などの社会事業を活発に行い、昭和 18 年度末には分院を含めて 1,702 人の入所者がいた。昭和 19 年に、戦時疎開のため、塩原温泉に疎開施設を作り、本院利用者の半数、房総の船形学園の子供たちを疎開させた。食糧難の時代に苦しい対応を迫られた。養育院 80 年史によれば板橋の本院には、養育院利用者の半数と、離島小笠原や八丈島住民の疎開を受け入れていた。戦局の押し迫る昭和 20 年 4 月 13 日には米軍の東京大空襲に引き続き、東京北部の B29 による空襲があった。当時の板橋養育院本院には、疎開島民 725 名を含めて 1599 名が生活していたが、施設の 9 割が灰燼に帰し、利用者 107 名が死亡した。この頃、養育院の男性職員の多くは召集され、看護婦、寮母主体の施設運営であったようである。このときの板橋住民の様子が、大久保氏の手記に詳しい。

東京都の焼夷弾による無差別爆撃で、1945 年だけで終戦までに 35 波の空襲で、100,632 以上の死者が出ている。焼夷弾による、無差別爆撃で、軍事基地、軍需工場のみでない。養育院の罹災は、戦時の東京のこのような状況の中での一こまでである。大久保氏の手記には、子供の目でこのころのことが記載されています。

(センター顧問医 稲松孝思)



昭和二十年四月のわが家の状況

私は昭和十五年三月に十人兄弟(八女二男)の家に生まれました。下から数えて二番目でした。大正八年生まれの長女夫婦と三歳の女の子一家も同居して大家族でした。

長女夫婦の夫(義理の兄)は出征中でした。わが家は製麩業(焼き麩の製造と販売)を営んでいましたが、原料である小麦粉が手に入らず休業中でした。店舗と二階建ての住宅と工場とが川越街道に面したわが家でした。

昭和二十年四月頃のわが家は、

四女の姉は板橋高等女学校三年生でしたが、陸軍造兵廠に勤労働員されていました。六女の姉は板橋第六国民学校五年生、長男の兄は三年生とともに水上温泉で学童疎開中でした。七女の姉は学齢になりましたけれども、板橋第六国民学校は休校状態で入学できずにやむおえず、母の出身地である長野県飯山市の母の実家に寄留して、地元の国民学校に入学しました。

住み込みの男性もいましたが出征中でしたから、この時に大人の男は当時五五歳の父ひとりでした。防空壕は工場内につと川越街道の歩道部分に十人位は入れる防空壕がありました。

当時五歳になったばかりの私ですが、空襲の記憶があります。空襲警報のサイレンの音や闇夜に光る探照灯（サーチライト）の光芒やB-29の機体とゆつくりと落ちてくる照明弾などです。空襲が激しくなると一階の座敷は畳を上げて土足で出入りしていました。夜も衣服を着て寝ていました。昼間も空襲はありましたが、艦載機P-51によるもので機銃掃射されるおそれがありました。

川越街道の中丸町寄りのタクシ―会社の万年堀には機銃掃射の跡が私の中学校時代まで残っていました。

ある夜、大規模な空襲がありました。足の悪い母と私は父の引くりヤカーに乗って布団をかぶって避難しました。行先は川越街道を下って下頭橋方面でした。下り坂の途中に左に見える建物が燃えています。と父が叫びました。幸い、その夜は家も家族も無事でした。日大病院とわが家は直線距離にしておよそ三百メートル、B-29から投下された焼夷弾がわが家を直撃するおそれは大いにあったのです。わが家が焼け残ったのは偶然の結果と言えます。

この夜の記憶をもとに板橋公文

書館（旧板三小）で調べたら、この日は板橋区にとつては大変な日であったことが分かりました。昭和二十年四月十三日の夜の空襲で板橋区役所、板橋駅、氷川神社、養育院、日大病院などが焼失したと記録にありました。

縁故疎開

空襲の危機が迫ると、家にいる幼い子供を安全なところへ疎開させようと両親は考えました。両親が考えたのは父方の祖父の出身地である長野県飯田市近郊です。昭和二十年五月、疎開の依頼をするために両親は飯田に行きました。私も連れられてきました。その時の旅行の思い出は断片的に覚えています。夜行列車は混んでいましたが、両親の間に座ることが出来ました。列車の窓は板で打ち付けられて車内の光が漏れないようにされていました。前の席の人が水筒で水を飲むのを見て、私も水を飲みたいと言って、吞ませてもらいました。

疎開の願いは、一軒目は断られ、一里（約四キロ）離れた二軒目は引き受けてくれました。その時にご馳走になった手打ちうどんはお

いしかったです。その時に母に言われた一言を覚えています。「カイチ口、今日はよく歩いたね。」私は大きな下駄を履いていました。疎開するのは、長女の姉（当時二五歳）と姉の子（三歳）、私（五歳）、妹（三歳）の四人でした。生活する場所は農家の庭に立っている物置の二階の座敷でした。自炊が条件でした。

疎開生活は六月に始まり、終戦を挟み十一月まで続きました。東京に帰ってきて、家族の

面々がそろって大きなテーブルで夕食を食べました。出てきたのは「すいとん」。母に「ご飯ないの？」と聞きましたら、「今のご飯よ。」と言われたのを覚えています。疎開先では何とかご飯（米）を食べることが出来ましたが、東京の食糧事情は悲惨でした。

翌年、昭和二年四月に板橋第六国民学校に入学しました。



空襲の跡がのこる養育院の敷地と渋沢栄一銅像